

渡邊雄三自伝

奔流する時代を見つめ続けて (1) 「人民新聞」第1161号 (2003年11・15)

「人民新聞」では、過去の運動・経験の共有と議論を目的にして、様々な人たちの半生を振り返りながらの総括を掲載してきました。そして、今号から新たに本紙の初代編集長である渡邊雄三さんの自伝を連載します。

渡邊さんは、旧制中学在学中に日本共産党に入党。敗戦直後の「血のメーデー事件」「山村工作隊」などを当事者として体験。労組専従・「中国新報」(注)記者をへて、「人民新聞」の前身である「新左翼」発刊を編集長として主導しました。

90年代、ソ連・東欧の社会主義体制崩壊に際して「理論的正当性を喪失」した渡邊さんは、サミール・アミンをはじめとする内外のマルキストとの交流の中で、再度確信を取り戻します。時代の転換点といえる昨今の情勢の中で、「社会変革の主体」である私たちが、先人たちの遺産を継承していくことの意義は大きいものがあります。この渡邊さんの連載を契機に、過去と現在・未来の闘いをむすぶ議論を広く呼びかけます。 (編集部) (注)「国際新報」



★渡邊雄三プロフィール

1931年生れ 52年東京都立大学入学
58年都立大学大学院卒業・鉄鋼労連専従
59年北海道太平洋炭鉱労組書記
66年新聞「国際新報」(10・1創刊)勤務
68年「新左翼」第2号から編集長 76年「人民新聞」改題
89年渡辺政治経済研究所設立～「News Letter」創刊
08年死去(享年77歳)

「郷士」だった両親の実家

両親の生地は福島県郡山市から入った山村で、両親の家は共に「郷士」という身分でした。封建的な風土の強い所では、結婚は家同士の結婚であり、個人の意思に基づく結婚などありえず、私の両親の結婚も郷士の家同士の結婚でした。

郷士とは東北地方特有の身分で、豊臣秀吉が兵農分離を行った際、武士を農村から切り離して城下町に住ませたのですが、東北地方は武士と農民との境目が曖昧だったため、在地の武士を認め、彼らの身分を郷士と名づけました。

それゆえ、資本主義の発達と共に、東北地方で郷士から寄生地主制が発展していったのは、当然の流れでした。私が帰省していた頃を思い返すと、母の実家は二階建ての広大な屋敷であり、

三頭の牛がいました。

二階は蚕室になっており、蚕が桑の葉を食む音で熱気に包まれていました。女達が桑の枝を入れ替えるため、気ぜわしく働いていたことを思い出します。

父の話によると、祖父は水戸藩から勤皇派の国学者を村に招いて農民を集め、彼らに国学を教えさせていました。明治維新の直後、廃仏毀釈運動が発生しますが、この時、彼は村の寺から僧侶を追放し、寺領を乗っ取って土地を配分した、とっていました。

それで、私の家には仏壇がなく、葬儀も神主を呼んで神道で執り行っています。明治維新の混乱期に祖父は土地・屋敷を全て手放してしまい、残った僅かな土地も小作に出していました。

小学校を卒業した父は、福井県の中学校の教員をしていた兄の家に引き取られ、福井中学を卒業後、逓信省官吏練習所に入り、定年まで逓信省の中級官吏として地方を転々としていました。父が生まれたのは郡山の在でしたが、母が生まれたのは、その奥の三春の更にもう一つ奥にある船引町の山合いの村でした。三春は三万石の三春藩の城下町、三春藩は秋田の徳川藩の支藩でした。

母方の祖父は手広く事業を営んでいました。造り酒屋、養蚕、煙草・生糸・絹織物の取引等々、地元の産物を扱って商売をしていました。

明治7(一八七四)年、福島県令(県知事)として着任したのが、鹿児島県出身の三島通庸でした。彼は着任するなり大規模な公共土木事業に着手し、その費用を税金で賄おうとします。

当時、国の法律制度が未整備だったので、彼は勝手に様ざまな租税制度を創設し、税を課します。これに反対する町長や村長の首を切り、議会を解散し、遮二無二強行しようとしたので、県政は混乱の度を深めていきます。



その中で立ち上がったのが、三春生まれの河野広中でした。彼は明治14(一八八一)年、自由党福島支部を結成、三島県政反対の狼煙を上げます。

明治15(一八八二)年、県道の建設計画を巡り、三島県令と県議会とが全面对決となります。この時、でっち上げられたのが、河野広中を首謀者とする三島県令暗殺未遂事件でした。

自由党福島支部員に対する警察の取り調べは過酷を極め、地元の人々にとってこれが深い心の傷として残り、後世に語り伝えられました。私もこの話を母から何度も聞かされました。

私の母の父、すなわち私の母方の祖父は、河野広中への資金提供者、今風にいえばパトロンでした。これは、地元の産物を手広く扱って商売をしていた関係上、当然の成り行きだった、と私は推測しています。

その後、河野と私の祖父とは仲たがいましたでしたが、私にはその理由は分かりません。多分、祖父が事業に失敗したことと、河野が借金の返済を拒否したことが原因だったのではないかと私なりに推測しています。

母は尋常小学校だけで、高等科に行かせてもらえなかったことを恨んでいましたが、その折、「蔵の中は河野広中の借金証文で一杯だった。あれを背負って東京の河野の屋敷の前に積み上げ

て、返済を迫りたかった」と、悔しがっていました。

その後、河野は衆議院議員となり、自由党の後身である民政党に所属し、明治の終わりには農商務大臣にまでなっています。

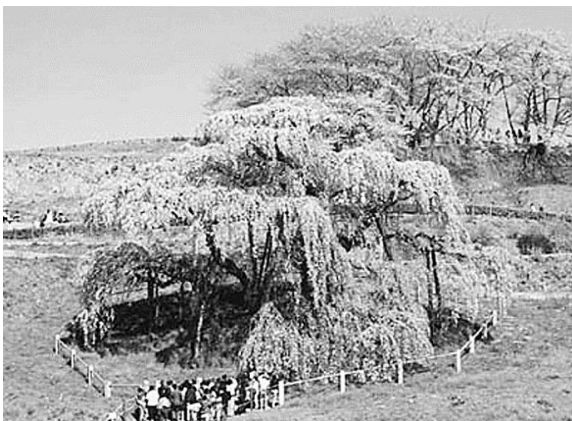
母の長兄、助川啓四郎は東京専門学校(早大の前身)を卒業後、村に帰り、村長になり、政界へ進出し、県議員、衆議院議員となります。所属政党は自由党の後身である民政党でなく、政友会でした。こんなところにも、河野広中と祖父との確執が尾を引いていました。

そんなわけで、私が生まれた時、既に私の家は助川後援会東京支部事務所のようなものでした。日曜日になると、家には田舎から東京へ出てきた若者が集まり、政治談義に花を咲かせていました。

政治談義といっても高尚な話でなく、地元の対立する政治家や応援者のミスや他愛も無い悪口の類が多かったように記憶しています。母も彼らの面倒をよく見ていました。

そんな環境の中で小さい時から育ったので、どの家でも家の中で日常政治の話をするのが当たり前だ、とっていました。普通、家の中で政治の話はしないものだ、と知ったのは、大きくなってからでした。

自由放任だった幼年時代



私は三人兄弟の末っ子でした。長兄は後継ぎとして育てられ、私が気付いた時には、既に二階に勉強部屋を与えられ、後継ぎとして育てられていました。姉が不幸な子供時代を過ごしていたことを知ったのは、姉が結婚してからでした。子供の頃、姉が泣いていたり、元気がなかったりしていたことがありましたが、これは身体が弱いからだ、と私は思い込んでいました。母親から理由のない折檻を受けていたことを知ったのは、私が大きくなってからでした。

母は祖母に過度に厳しく躰られたため、その心の傷から自分の娘を心から愛することができなかつたからだ、と私は推測しています。

祖母は三春の城下町に住む武士の娘でした。それが郷土とはいえ、田舎の山の中の家に嫁いできたため、「周囲の小作人や貧乏百姓に馬鹿にされまい」と彼女は張り切り過ぎて、私の母の心を傷つけたのでしょう。

母は子育てに失敗したことを気付いたのでしょう。私は自由放任、気ままに育てられました。

私の子育ては、「姉やん」任せでした。ご飯を食べ終わるや、一人でトコトコと女中部屋へ歩いていき、寝ていたといひます。あまり静かなので見に行ってみると、ケタケタ笑いながら一人遊びをしていた、と母が言っていました。あまり寝てばかりいたので、私の頭は絶壁で、小さい時、兄や姉から「絶壁頭」とからかわれていたことを思い出します。

私は子供の時、親に「してはいけない」と、叱られた記憶はありません。私が母親に大事にされたのは、もう一つ理由がありました。それは、私が体温が高い体質なので、冷え性の母は冬寒くなると、寝ている私を抱いて、自分の布団の中で漬物石のように抱きしめていました。

子供時代の私にとって忘れることの出来ない友達があります。それは、10年以上にわたって一緒に暮らした猫の「ミイコ」でした。私が三つの時貰われてきたと記憶しています。

私が一四歳の時、私の目の前で食べ物を吐き出したので見ると、その中に大きなサナダ虫がいました。私が驚いてそれを始末すると、ミイコはいなくなり、そのまま帰ってきませんでした。

冬になると、私の布団の中に子供をくわえてきて、寝ていました。それで私は小さい時から蚤と一緒にでしたが、「嫌だ」と思ったことはありませんでした。

魚はどんなに隠しても探し出すし、食べ物を見つけることには執着心が強く、お櫃の蓋をひっくり返してご飯を食べたので、油断できませんでした。

鼠もよく取りました。猫は鼠を取ってくると、必ず飼い主に見せ、誉めて貰おうとします。そして、鼠を一旦逃がして追いかけ、取り押さえては放り投げ、精一杯弄んでから食べます。母はこれを決して制止しようとしませんでした。

理由は「それをして、猫は鼠を取らなくなるから」でした。ミイコが鼠を取ってくると母は誉めてやり、六畳の間を締め切って、鼠を食べ終わるまで、猫の自由にさせていました。

その後の掃除が大変でした。唐紙や箆笥、畳に鼠の血が着き、鼠から落ちたノミやシラミはいるし、掃除が大変でしたが、母はミイコに満足するまでやらせていました。これに幼い私は大きな影響を受けました。

奔流する時代を見つめ続けて (2) 「人民新聞」第1162号(11・25)

自由放任だった幼年時代

小さい時、夏休みになると田舎へ帰っていました。東北本線に乗り、利根川に広がる田んぼで朱鷺を見たことがありました。

赤い頭と首に白い羽と尾、それが緑の田んぼの中にいたのですから、乗客が皆「朱鷺だ、朱鷺だ」と叫んで、身を乗り出して騒いでいました。が、この優雅な田園風景も、白河の関を越え東北地方に入ると一変しました。

山の中に点在する重苦しい東北の農村地帯です。米を獲った後に麦を播く二毛作地帯で、雪深い東北は一毛作地帯、農村の風景も一変します。

子供の頃、父母の話を聞いていると、「農民が芝居や遊芸に興ずるのは御法度」という雰囲気でした。大学で日本史を学んだとき、「百姓は絹の衣を着るべからず、元結は藁を使へ」との幕府が出した御触書を見ましたが、「実際には東北地方では、明治以降もこのお触書が生きていた」と思いました。

そんな私の中の常識が覆されたのは、大阪に出てきて、能勢の農村を見た時でした。百姓が人形浄瑠璃を語り、芝居小屋までありました。能勢が山深い山村であるとはいえ、街道筋に面しており、私の父母の生まれ故郷との余りの違いに驚きました。

父母の話を思い出すと、戦前の私たちの生活は、娯楽に興じるなど贅沢の極みで、特に東北の山村では「怠け者」「道楽者」とのレッテルが貼られ、村で相手にされないという雰囲気でした。

小学校入学



私の家の八畳間を週一回書道塾に貸していました。それで私も見よう見真似で小さい時から書道を習っていたので、小学校一年生から書道の成績は抜群でした。

ところが、二年生になって師範付属小学校に転校し、書道の教科書の種類が変わったため、それまでの字の書き方が全て直されました。それからまともな字が書けなくなり、今日に至っています。 付属に転校したのは私の意思で、母は乗り気ではありませんでした。私は幼友達の一人に突然電車の定期券を見せられました。電車に毎日乗って学校へ

通うという話を聞いて、私は母に「定期券を買ってくれ」とせがみました。

はじめ、母は私の転校に乗り気ではありませんでした。東北地方の山村から出てきた母は「山の手の奥様」に劣等感を持っていたからでした。

言葉に訛りがあるし、それ相当の着物も買い揃えなければならなかったからです。私に文句を言っていました、とうとう私の懇願に負けて、私は電車通学ができるようになりました。

大泉に東映の撮影所があったので、いいこともありました。通学の途中、一流の俳優、芸人と会うことができたからです。

駅で電車が来るのを待っていたエノケン、ロッパ、金五郎の姿は今でも目に焼き付いています。話が飛びますが、戦後、込み合う電車の中で、私の目の前に、「青い山脈」のマドンナ、杉洋子がつり革を掴んで立っていました。

練馬から親子連れの二人が乗り込んできて、私の目の前に座りましたが、何か見たことがある顔だと思って見ていたら、デビュー間もない美空ひばり親子でした。練馬駅前の旅館に親子で泊まり、電車で撮影所へ通っていました。

戦前、俳優の地位は低く、「芸人」と呼ばれており、彼らも電車で撮影所通いでした。自動車での送り迎えとは無縁の存在でした。

「戦前の教育は悪いことばかりではなかった。いいこともあった」というと、怪訝な顔をされますが、これは私の本心です。

最近では、地図を渡され見ず知らずの土地を歩き目標にたどり着く、「オリエンテーリング」というスポーツがありますが、地図を見て目的地まで道を歩くことを教えられました。それは戦前の教育が全て「軍事」から出発していたからでした。

飯盒の炊き方、雑巾の縫い方、ボタンの着け方、靴下の穴の塞ぎ方等々、日常生活に必要なことは全て、小学校で教わりました。その理由は男女平等と正反対の、ただ一つ、「兵隊に行った時、困るから」でした。

奔流する時代を見つめ続けて (3) 「人民新聞」第1168号(2004年2・5)

伯父・助川少佐の死から 朝鮮労働党史への懐疑へ



小学校で本格的な農業も仕込まれました。師範学校には寮があり、其処の便所から肥えを汲んで畑まで担いできて、細かく切った稲藁に肥えを掛け、積み上げるといふ、本格的な堆肥作りまで習いました。私の家の庭に肥を撒いて百姓をしていたのは父でした。私の家の敷地は150坪で、屋敷の前に芝生を敷き、その向こうを畑にしていました。

目の前の庭に黄色いものがあるという光景は、決して気持ちのいいものではありませんでしたが、採れた苺が甘く美味しかったので、納得していました。

母方の家の次男は、陸軍士官学校を出て職業軍人でしたが、私が小学四年生の時に中国東北部の「満州」で戦死し、その葬儀に出席しました。この時、戦死の状況は「一個中隊を率いて平原を行進中、匪賊に撃たれ命を落とした」、と聞かされました。

それから数十年後、伯父の死に関して全く違った情報に接しました。ある日、新聞社に届いた朝鮮総連機関紙「朝鮮時報」の一面に、キム・イルソン率いる抗日遊撃隊の歴史の連載が始まっていました。

それを読んで驚きました。私の伯父である「助川大佐を殺したことが勝利の第一ページだ」と書かれていたからでした。彼の階級は戦死した時少佐で、死後中佐に進級したのであり、「大佐」も戦果誇大のための誤報でした。

戦死した場所は吉林省の大平原だ、と聞かされていました。大きくなって、私は中国共産党の抗日ゲリラに殺されたものと思っていました。これが、朝鮮労働党の歴史に疑問を抱いた始まりでした。

朝鮮労働党のゲリラの根拠地はロシア領内にあり、越境してヒット・エンド・ランを繰り返していましたが、彼らが朝鮮半島内に恒久的な基地を持ったことがない、というのは当時から言われていたことでした。それ以来、私は「朝鮮労働党の歴史が偽造されている」、との疑いを持つようになりました。

戦争に翻弄される暮らし 満州で私腹を肥やしていた岸



父親は私が小学五年生の時、司政官としてスマトラ島に派遣され、父不在の生活が始まりました。今から思い返してみると、この年の夏休みは姉と共に富士登山に連れてってくれたし、父の故郷や鍾乳洞にも連れていってくれました。

富士山の頂上まで上がり、本当にいい思い出になりました。しかし、四四年になると、配給で食べられなくなり、母が着物と引き換えに食

べ物と交換することでは追いつかなくなり、畑を借りて耕すようになり、私も学業よりも、その手伝いを優先するようになりました。

戦争が激しくなると、共に兄も姉も軍事工場に動員され、兄は殆ど泊まりこみの毎日でした。四三年の夏休み、突然、代議士の伯父が私の家を訪ねてきました。何時もは、玄関から「ご免下さい」と言って入ってくるのに、この日ばかりは庭先から入ってきました。驚いて私は母を呼びました。

伯父は、母とヒソヒソ話していましたが、直ぐ帰りました。その数日後、大変な知らせが飛び込んできました。伯父が乗った関釜連絡船の「崑崙丸」が米潜水艦に撃沈され、誰も助からなかった、というのです。

私も親戚代表の一人として伯父の葬儀に出席しましたが、大変な葬儀でした。「大政翼賛会葬」として行われ、先ず、天皇の名代として侍従長が玉ぐしを捧げ、その後、永野陸軍令部総長が続き、ベタ金の礼装をした軍人達の列が延々と続きました。

それから二年後、戦争に負け、極東軍事裁判が始まりました。テレビに岸信介の顔が映った時、母が突然叫びました。「兄さんが『岸は腹黒い奴だから、何されるか判らん』といていた」

大学で日本史を勉強するようになって、その背景が色々判ってきました。伯父が満州に渡った目的は、政府の本土決戦決断に伴って、食糧を満州から本土へ運んでこなければならなくなり、そのための交渉で渡満したのです。

「岸は腹黒い奴だから」と、伯父が母に告げた理由は、10年ほど前、NHKのテレビを見て、その謎が解けました。41年まで岸は、満州国首相をしていましたが、彼は農民にケシの栽培を強要し、それから阿片を精製し、当時上海にあった陸軍特務機関の親分・児玉譽士夫に売却し、私服を肥やしていたというのです。

伯父は東條内閣の農林政務次官をしており、戦時食糧計画の立案者でした。満州国政府に食糧増産を求めることは、阿片栽培を縮小もしくは止めろということです。

それで、岸の背後に児玉がいることを知っていた伯父は、出発に当って、万が一のことがあった時、家族への伝言を母に託すため、私の家を訪れていた、と推測しています。

伯父の長男は、新憲法下初めての総選挙で当選し、59年自民党議員として始めて訪中しましたが、61年白血病で急死してしまいました。

「家を守ろう」と必死だった 東京大空襲恐怖だった戦闘機の機銃掃射



45年3月10日、東京大空襲は忘れようにも忘れられません。東京市街地の空が真っ赤に燃え上がり、夜明けまで続きました。

私の家は市街地と農村地帯との境目にあり、焼ける直前で助かりましたが、それからは連日連夜、焼夷弾と照明弾が落とされ、家の火災を防ぐのに必死でした。

先ず、照明弾が落とされ、辺り一面が昼間のように明るくなります。すると、焼夷弾が落ちてきます。

焼夷弾は長いアルミの筒の中にガソリンでゴムを溶かしたものが入っていて、着地すると爆発し、それが周囲に飛び散ります。その上から火の着いた布切れが落ちてきて、着火する仕組みになっていました。

まず、照明弾が落とされ、周りが明るくなると、庭の防空壕から這い出して、ポンプで汲み出した水を家に掛け、燃えている布切れを消すという作業の連続でした。だが、隣近所を見ると、逃げて誰もいませんでした。だが、「父が帰るまでここを守ろう」と私と母、姉は必死でした。

私が通っていた中学校は一つ、爆弾が二発も落とされ、校庭に大きな穴が二つも開いていました。校舎の窓ガラスは殆ど吹き飛ばされ、授業など出来るものでありませんでした。

戦争で、今でも忘れられない恐怖の記憶があります。それは戦闘機による機銃掃射でした。

普通、私達は弾が近いか遠いかは、目で確認する前に音で判断していました。自分の方に近づいてくるのか、遠のいていくのか、音を聞いて聞き分けていました。

だが、戦闘機による機銃掃射では、耳に聞こえる前に、目の前の建物が燃え上がっていました。

逃げようとする前に殺されている、というこの恐怖は今でも忘れられません。

学校の帰り道、畑の中を一直線に走っているいつもの道を通っていた時でした。まず、目の前の白壁の土蔵が破壊され、屋根が吹っ飛びました。その後から「ゴーツ」という轟音が聞こえたかと思ったら、戦闘機の機影が頭の上を掠めていきました。

奔流する時代を見つめ続けて (4) 「人民新聞」第1169号 (2・15)

軍事教練のあった中学時代 反骨精神の「修身」の先生

中学校は、小学校の近くの大泉中学でした。ここでは、軍事教練もあり、人殺しの訓練も受けましたが、異色の教師もいました。

修身の先生で、退職間近の老人でした。服装は、当時の国民服を着て教壇に立っていました。だが、彼は授業で「忠君愛国」の話を一度もしたことがありませんでした。「忠義」という言葉がありますが、忠と義が切り裂かれる悲劇、藩主に忠を尽くすために息子を我が手で殺さざるを得なかった母の悲劇、歌舞伎十八番の一つ「仙台萩」を教壇で唸って授業は終わりでした。

それが終わると、小泉八雲「怪談」の中の「耳無し芳一」等々。それで修身の一年間の授業が終わり、試験やレポートの提出もありませんでした。いま思うと、彼は徹底した反骨精神の持ち主でした。

中学の古典文学の授業について、私は今もって理解できないことがあります。それは、紫式部の「源氏物語」を中学生に教えていることです。

「源氏物語」は、近親相姦をテーマにした文学です。それを何故中学生に学校で教えなければならないのか、今もって私は理解できません。

私は「源氏物語」が近親相姦をテーマにした文学であることを知ってから、全然勉強する意欲がなくなりました。この文学的価値の高さを否定はしませんが、中学生が何故これを義務教育で学ばなければならないのか、もっと他に適切なものがあるはずです。

私は紫式部の「源氏物語」よりも清少納言の「枕草子」の方が好きです。清少納言は自分の好き嫌いをはっきり言っているからです。 宮廷に仕える女性がこうも自己主張することが、どれだけ

勇気の要ることか。私はこんな生き方の方が好きです。

ついに迎えた敗戦混乱を避けて故郷へ



8月13日には、町内会を通じて敗戦が我々一般庶民にも伝えられていました。空襲もなくなり、米軍機が飛ぶ音も、高射砲の発射音もめっきり減り、静かになりました。

15日の正午、「終戦の詔勅」という玉音放送を聞いた後、家に帰ってきた兄は、私と姉に郡山から三春までの切符を渡し、「米軍が東京に入ってきたら女子供は皆殺した。直ぐに上野駅へ行って、田舎へ帰れ」と言いました。

上野駅に着くと、既に大変な人ごみで、

「並ぶ」どころではありません。駅員が何人か改札口の上に跨って、入り口に殺到する人の首を捕まえては、プラットフォームへ放り投げる、といった状態でした。私達もしっかり手を握り合って、離れ離れにならないよう、この流れに身を任せるほかありませんでした。

何時間私達も並んだでしょうか。やっとのことで青森行きの急行列車に乗り、座ることができましたが、その後が大変でした。止まる駅毎に、大きな荷物を幾つも抱えた復員兵士が、有無を言わず荷物を車内に放り込み、窓から乗り込んできました。

たちまち車内は身動きできなくなり、息の詰まりそうな状態で郡山に着きました。そこから磐越東線に乗り換え、三春駅に着いたのは夜遅くでした。駅には伯母が迎えに来ていました。

この伯母は父の姉で、三春で一番大きな旅館・川北屋に嫁いできた人で、これまでも夏休みになると、ここに帰っていたので、顔なじみでした。

奔流する時代を見つめ続けて (5) 「人民新聞」第1170号 (2・25)

氣力も体力も奪う「飢え」との闘い そんな中、父親が復員

東京の情勢も心配した程でなく、一週間程度で東京へ戻りましたが、母の実家に泊まった夜、狼の声を聞いたことは今でも忘れられません。

夜寝ていると、突然、「ケーン、ケーン」という鋭い叫び声が、向かいの山から聞こえてきました。その声は仲間を呼んでいるようでした。

一緒に寝ていた従兄弟達は「狼だ、狼だ」と言って、布団の中へ潜り込んでいました。多分、私は狼の鳴き声を聞いた最後の日本人の一人ではないか、と自負しています。

伯父の家が私の家から二キロほどのところにあり、リヤカーを引いて母と共に其処へ通い、耕せるところは全て耕しました。小麦を収穫した後、コーリヤン高粱・とうもろこしなどを作っていました。だが、一四歳の食べ盛りの私には足りるはずもなく、やせ細っていくのが自分でも分かりました。

それで、蛙でも蛇でも、食べられる物は何でも食べました。

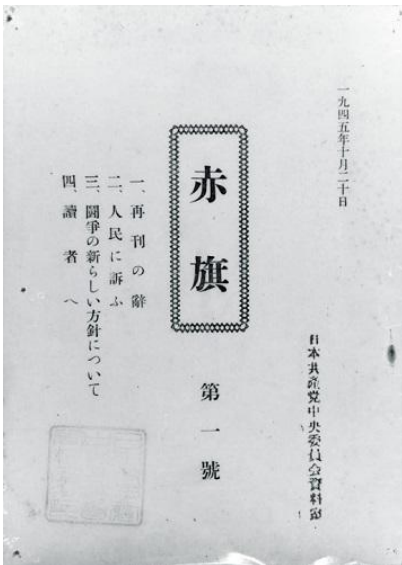
人間は不思議なもので、飢えていくと動くものが何でも食べ物に見え、自分がまるで動物に返ったようでした。15歳の春、母は小麦を干そうとして物置から持ち出してきた籠を開けた途端、悲鳴を上げ、飛び上がりました。

見たら、しま蛇でした。まだ冬眠から覚めていなかったのか、ノロノロしていました。私はその蛇を見た途端、脇にあった箸を掴んで、蛇の頭に振り下ろしていました。

動かなくなった蛇の頭を落とし、皮を剥いて胃袋を見たら蟻が入っていましたが、冬眠明けなのか、身体は未だ痩せていました。尻尾を切り落とし、七輪で火を興し、その肉を焼きに掛かりました。すると、姉が寄って来て「雄ちゃん、私にも頂戴」と言ったので、二人で分けて食べましたが、美味しいものではありませんでした。

飢えて身体が痩せ、無気力になっていくのを自分でも分かっていたのですが、どうにもなりません。そんな時、15歳の6月、父が突然復員し、原職に復帰しました。それで、私の生活は一変しました。精神的にも、肉体的にも元気を回復しました。

日本中が騒然となった朝鮮戦争 共産党入党、政治的に開眼



敗戦後間もなくだったと思いますが、東京駅近くの三菱三号館がソ連駐日代表部となっており、そこで毎日曜日朝からソ連映画が無料で上映されていました。それを私が知ったのは、新聞からだったと思いますが、無料で映画が見られるので、日曜が来ると其処へ行くのを楽しみにしていました。

「10月のレーニン」「若き親衛隊」など、感動的な映画もありましたが、「ゴリキー三部作」など、幼い私には退屈な映画もありました。そんなことで、当時からソ連に対する嫌悪感はありませんでした。

戦後の学校生活で、今でも忘れられないのは、T先生という数学の教師です。私が通っていた中学の近くに陸軍予備士官学校があり、そこが閉鎖になって来た人でした。

彼が教えたのは解析幾何学でした。多分、高校の解析幾何学の教科書を書いたのは彼だと思えますが、実にユニークな授業でした。

ピタゴラスの定理を教えるのに、先ずナイル川の巨大な堤防、エジプトのピラミッド建設がどのようにして成し遂げられたのか、説明してくれました。

有限と無限、微分・積分、二次微分、ニュートン力学、 $F=ma$ (運動の法則)なども、単なる天才の想像の産物でなく、当時の社会的な必要性の産物であることを、彼は教えてくれました。これは、後にマルクス主義を学ぶに当って、大変役立ちました。

大学受験に失敗した私は、この中学、後の新制高校で三年生を二度やることになりました。その時、私の運命を変える事件、朝鮮戦争が起こりました。

日本中が騒然とする中、学校の中もこの話で持ちきりでした。そんな中で共産党に入ったのですが、どのような経緯で入ったのか、私に全然記憶がありません。

当時、私を含め六人の細胞員がいました。主な武器はガリ版刷りの細胞新聞でした。新聞に「警察予備隊員募集」の記事が出ていました。教室で、皆がストーブを囲んでいる時、これを私が持ち出すや、皆が「俺は自衛隊に入る」「止めておけ」等々、勝手にガヤガヤ議論を始めます。それをそのまま記事にして、学校中にばら撒いたら、学校の雰囲気が一変しました。これが私にとって政治活動への開眼となりました。

奔流する時代を見つめ続けて (6) 「人民新聞」第1171号 (3・5)

共産党が分裂し「所感派」へ 父親は警察へ転職



50年夏、共産党が非合法化され、北京に日本共産党指導部が創設され、所感派と国際派に党が分裂しました。私達もどちらを選択するのか、踏絵を踏まされました。

一人ずつ細胞キャップの前に呼び出され、いずれを選択するのかを問われます。私は迷わず所感派を選択しましたが、全員同じでした。

私は、以前から兄が国際派であることを知っていました。私が国際派に行かなかったのは、兄の活動を見ていて、彼らが「議論倒れ」で、大衆闘争をそっちのけに

し、その結果として大衆闘争を疎かにする、という彼らの作風が嫌いだったからです。

党に非合法部門ができ、私は裏(非合法部門)のレポ(文書運搬役)になっていました。親には予備校に通っていることにしていました。

その頃、父は定年退職を前にして逓信省を辞め、こともあろうに国家警察本部関東地方局通信課長になりました。

家に帰って包み紙を探していたら、関東地方の警察電話網の系統図が出てきました。私はしめしめと思い、これを党の地区委員会に持って行きました。

あの当時は、敵も味方も混乱しており、そんな状態でした。何時までも中途半端なことをしているわけにもいかず、52年春に都立大に入りました。

大学入学早々に「血のメーデー」事件の洗礼



大学に入るや「血のメーデー」に遭遇しました。その日の朝、突然、党本部に召集されました。到着するや有無を言わず、直ちに釘を打ち込んだ棍棒を持たされ、メーデー会場の二重橋前広場へ連れていかれました。

私達が会場に到着した時、既に目の前の警官隊と対峙しており、労働者の部隊は戦争で鍛えられていたためか、棍棒を横にして既に銃剣術の構えで、

始めからやる気満々でした。それで、最初から警察官もビクビクしていました。

警官隊と殴り合っている間に、宮城前の広場に駐車していた自動車が次々にひっくり返され、黒煙が上がりました。警官は捉えられると、次々に堀に投げ込まれ、彼らは泳いで対岸へたどり着き、石垣を這い上がっていくのを、私たちは拍手喝采していました。

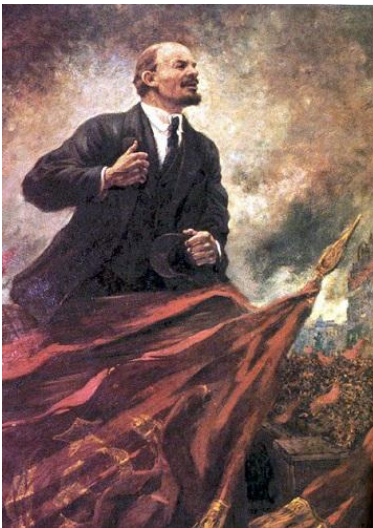
私も余裕が出てきたのか、指に痛みを感じたので、見ると右の親指に釘が刺さって血が出ていました。救護班を探して包帯を巻いてもらいました。GHQの周りは銃剣を持った憲兵によって警備されており、彼らは厳しい表情をしていました。

その直後、大学で面白い事件が起こりました。学生課長の机の中から碑文谷警察署の刑事の名刺が出てきました。

大学中が蜂の巣を突付いたような騒ぎになり、学生課長はつるし上げられ、警察署にも抗議に行くやら、大変でした。当時、私は大学に入ったばかりだったので、詳細は分かりませんが、これは、職員細胞と学生細胞との合作でした。

奔流する時代を見つめ続けて (7) 「人民新聞」第1172号 (3・15)

大学で「10月のレーニン」上映 コミンフォルム機関紙翻訳



秋の学園祭で、かつて私が見たことのあるロシア映画「10月のレーニン」の上映を提案したところ、すんなり認められました。ソ連大使館からフィルムと映写機を借り、シナリオの日本語への翻訳も出来、上映は成功裡のうちに終わりました。

私はその後始末に追われていたので、後から聞いて知ったのですが、映画を見て興奮した学生達によって自然発生的なデモとなり、駅前まで「インターナショナル」を歌ってデモが行われました。当時の大学は、そんな雰囲気でした。

都立大学内にコミンフォルム機関紙「恒久平和と人民民主主義のために」の翻訳工場がありました。多分、私達がこの機関紙の外国語版を個人的に手に入れて読んでいたのを、近くにいたマル秘の党幹部が、組織的な翻訳を勧めたのではないかと私は推測しています。

大学内には有利な条件もありました。仏語科の教授・小場瀬卓三はルイ・アラゴン著『レ・コミュニスト』の翻訳者でした。中国語科の教授・竹内好は新中国の紹介者・文芸評論家として有名な人でした。

そんなこともあって、仏語科と中国語科の助手が協力してくれ、党員だけでなく、周辺の学生も参加してくれました。私はこの仕事に直接タッチしませんでした。記事を適当な長さに切り、各自が翻訳した文章をつなぎ合わせるというやり方で、試行錯誤はありましたが、結構うまく機能していました。

これで、英国人が書いた文章は英語から翻訳され、フランス人の書いた文章はフランス語から翻訳されたので、重訳を避けることが出来、原文に忠実な翻訳が可能になりました。

三年生時に「細胞キャップ」「重水製造施設」反対闘争

三年生の時、細胞キャップを務めることになりました。その頃、大学内に原子力開発のために必要な「重水製造施設」を建設する計画があることがわかりました。それで、中目黒駅前でビラを撒くことになりました。

都立大には昼夜の学部がありましたが、どちらの講座も自由に選択でき、昼夜の区別はありませんでした。ビラ撒きの朝、集まったメンバーの顔を見たら、夜間生も含まれていました。家族を抱えた者、親兄弟を養っている者…。しかし私は、彼らに「帰れ」とは言えませんでした。

私はその場で、「私の責任で彼らを守るほかない」と心に決めました。

駅の直ぐそばに目黒警察署があり、ビラ撒きを始めるや、私服が出てきました。私は、ビラ撒きを止めて、引き揚げるよう手で合図をしたので、皆は駅の方に走り出しましたが、私服を牽制している間に、私は拘束されました。

それから、私を逮捕した警察署の方が大変でした。昼前だったと思いますが、突然、二階から警官が一齐に階段を駆け下りる大きな音が鳴り響いたと同時に、学生の叫び声が、署内に響き渡りました。間もなく共産党都議の梅津さんが身元引受人となって、私は保釈となりました。

警察を出る時、梅津さんが私に紙包みを握らせてくれました。後で開けて見ると、中に大福が二個入っていました。万が一のことを考えて、差し入れを用意してくれていたことに感激しました。

奔流する時代を見つめ続けて (8) 「人民新聞」第1173号 (2004年3・25)

戦時中の罪の深さにさいなまれ酒で荒れた 元憲兵の寮生

当時、何年たっても戦争の後遺症から抜け出せない学生がいました。彼は寮生で、日頃は大人しく控えめな性格でしたが、一旦酒を飲み出すと人格が一変し、凶暴になるので、寮生から恐れられていました。

彼は、拳銃と実弾を隠し持っていました。何故、手放すことができなかったのか？それは、彼が憲兵で、しかも旧満州のソ連国境近くに配属されていたからでした。彼はスパイと疑われた中国人を尋問し、自白しなければ拷問し、それでも抵抗する者を射殺していました。

その罪の深さに苛まれた彼は、拳銃と実弾を捨てることができず、日本に持ち帰っていました。しかも彼は、それを酒で紛らわせていました。

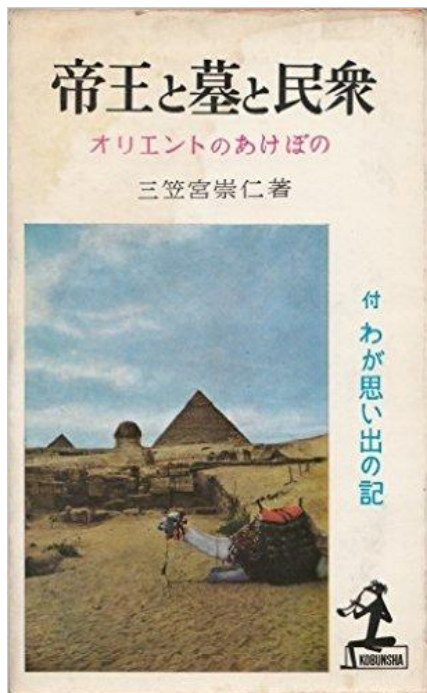
実は、川北旅館の後継ぎであった私の従兄も、敗戦で中国から帰国後、夜になると部屋に引き籠もり、一人で酒を飲み、刀を降り回して、唐紙や障子、筆筒を切り裂き、数年足らずで、悲惨な最期を迎えました。

党の「広範な統一戦線」方針で 三笠宮と大学で極秘の勉強会

ジュネーブ協定が調印され、朝鮮戦争が終わり、共産党も「広範な反米統一戦線」に路線転換した時でした。職員細胞から連絡があったので行くと、「絶対に他人に言わないでくれ」と念を押されたので了承すると、意外な事が依頼されました。

「三笠宮が大学に来る。護衛の私服警官も付いて来るが、彼を通してやってくれ」、と言うのです。

「何故か」と聞くと、「党は広範な反米統一戦線に方針転換した。については、宮中工作のため、三笠宮と勉強会をこの大学内ですることになった」、というのです。



当時、警官は情報収集のため、学内に入ってきて掲示板をメモしていました。私達は彼らを見つけると、取り囲んで妨害し、学外へ追い出していました。それで、こんな要請になったのです。

当日、私一人で大学正門から構内を見渡せるところにいて、監視していました。大学正門前で自動車を降り、警護の警官を後ろに三笠宮が大学の建物内に入るまで確認しました。

これは、表向きには「にいなめ会」との名前で、会報も出ていません。私は高槻市の図書館で確認しましたが、最近になって廃棄処分されていました。

中身はシベリアに居住するツングースやギリヤークなど、モンゴリアン諸部族の祭祀の調査報告でした。天皇家の由来を明らかにしようとした研究会であることが一見して判りました。

三笠宮は紀元節の復活が持ち上がった際、『帝王と墓と民衆／オリエントのあけぼの』を、光文社のカッパブックスから出版して

います。これを読むと、「彼には脈があったのかな」、と私は思っています。

奔流する時代を見つめ続けて (9) 「人民新聞」第1174号 (4・5)

55年、木曾開田村で農村調査 独特の封建的地主性が残存



54年、「寮に警察が捜査が入る」との事前情報を入手しながら、何の対策も取らなかったミスで、私は細胞キャップを辞任しました。

55年夏、党本部で学生対策部の会議が召集され、出席したところ、木曾の御嶽山の麓の開田村での農村調査でした。ここは、長野県で一番山奥の村で、東大社会科学研究所の若手研究者も参加しており、メンバーも充実していました。

私は、「これは五二年綱領の半封建説を正当化するための調査ではないか」と思いましたが、日本農村社会の暗黒部を見せられ、強烈な印象を受けました。開田村は「馬小作」といって、地主から親馬を借り、子馬を育てて返すという、農地解放後も独特の封建的地主制が残存していた村でした。

農家の聞き取り調査のため個別訪問を始めたところ、何処の家にも、入り口の座敷の奥に鉄格子

のいった座敷牢があり、そこに障害者が閉じ込められていました。これを村民は訪問者に隠す風もなく、私達と対面したのには、こちらの方が驚きました。

農村の婚姻関係は、全て地主は地主、百姓は百姓、小作人は小作人と、階層別の関係で成立しており、それぞれの階層を縦断する縦の関係は、戦前御法度でした。だが、村役人筋や地主となると、村の範囲を越えて広い血縁関係の成立が可能ですが、特に小作人となると、婚姻関係が自ずと狭くなります。

それで、親戚同士の結婚を繰り返している間に、障害者が生まれるようになりました。この農村社会の階層性が、木曾の山奥の集落ゆえに、このような悲惨な障害者差別を生み、開田村に残存していた、と私は考えています。

党の路線転換とともに 非合法時代のマイナス面が噴出

後でHと一緒に仕事をするようになって、色々話しているうちに、彼は私の同級生の家に下宿していたのではないかと思い、聞いて見たところ、「そうだ」との答えが返ってきました。私の同級生Nは仏文科の女性で、兄が私より二年上で党員でした。

当時、各細胞には「テク」という党機関の非合法活動を支援している特殊な部門があり、彼らは学内の活動を一切免除され、上級機関に所属していました。彼らの了承を得なければ、例え細胞員の家であろうとも、細胞会議に使うことができませんでした。

テクに「Nの家を会議に使わせてくれ」と打診したところ、「ノー」の返事が返ってきたことを思い出したのです。思い返して見ると、私たちは狭い枠の中で暮らしていました。

朝鮮戦争が終わり、党の路線転換とともに、非合法時代のマイナスの面が一斉に噴出し、その対応に追われるようになりました。

私達の細胞からも、「山村工作隊」の同志を何人か送り出しましたが、六全協後、彼らが帰ってきました。その内の一人の廃人同然の姿を見て、私は自らの罪の深さに慄きました。

五四年初め頃から、コミンフォルムの機関紙が迷走を始めました。平和共存と民族自決（内政不干涉）といずれを優先すべきか、相反する二つの主張が同時に載り、紙面から目的意識性が喪失し始めました。

これは、今から考えれば「中ソ論争」の始まりでしたが、私達のレベルでは当時知る由もなく、何が何だか分からない状況になりました。

奔流する時代を見つめ続けて (10) 「人民新聞」第1175号 (4・15)

ソ連が「労農派」支持へ 突然の転換に動揺



56年、大学を卒業したものの、それまで何の勉強もしていない自分に気がきました。それで「マルクス経済学を本格的に勉強しよう」と、立大大学院に行くことにしました。

当時の立大には、当時マルクス経済学の第一人者と言われた宮川実が教授で、助教授が山本二三丸という新進気鋭の学者が揃っていたからでした。しかし、入学してみると、聞いていたのは大違いでした。

宮川と山本との対立は、学説の違いを超えて、感情的な憎悪にまで発展し、どうしようもない状況に陥っていました。私は山本教授の講義を取りました。

講義は、マルクスがゾルゲに宛てた手紙の中に、価値法則について書いたものがありますが、一年間かけてその手紙を読むというものでした。

「大学院とは自分で勉強する所であって、人から教わろうとする所ではない」と思い始めていた頃、私にとって大変ショッキングなニュースが飛び込んできました。

日本のマルクス主義学会は、社会党系の「労農派」と共産党系の「講座派」とに分かれていましたが、日本資本主義についてマルクス主義の大本山であったソ連は、いうまでもなく「半封建制説」の講座派支持でした。それが「資本主義制説」を取る労農派支持に転換した、というのです。

早速、ソ連の東洋学研究所の所報を取り寄せ、ロシア語をかじっていた私は、それを自分の目で確認しました。これは中ソ論争の成り行きからすれば当然の話ですが、当時その事を知らなかった私は動転しました。「半封建説」の井上晴丸さんほか、何人かの学者を訪ね、ソ連の突然の転向について聞いて見ましたが、満足のいく回答は得られませんでした。そんな中で私に声を掛けて来たのが堀江正規さんでした。すれば当然の話ですが、当時その事を知らなかった私は動転しました。

「半封建説」の井上晴丸さんほか、何人かの学者を訪ね、ソ連の突然の転向について聞いて見ましたが、満足のいく回答は得られませんでした。そんな中で私に声を掛けて来たのが堀江正規さんでした。

鉄鋼労連のアルバイトから 太平洋炭坑労組の書記に

堀江さんは、東京新聞社記者のレッド・ページ組の一人でした。53年から54年にかけて、岩波書店から20巻にも及ぶ『日本資本主義講座』が出版されましたが、彼はその編集責任者でした。これは北京駐在の日本共産党指導部が書いた「新綱領」の解説書で、当時の共産党系研究者を総動員して作られたものでした。

57年8月、彼から鉄鉱労連にアルバイトに行くよう言われ、行って見たら、私の机の横にいたのが不破哲三でした。

鉄鉱労連本部には、当時賃金論で有名な永野さんがいました。彼は戦前からの活動家として知られた人で、当時は鶴のように痩せていました。賃金論で名の通った千葉利雄という書記がいて、書記局は多士済済でした。

59年、ある日突然、堀江さんから彼の自宅に呼び出されました。私の目の前に座っていたのは、高野実・元総評事務局長でした。

間もなく堀江さんから電話があつて、「釧路の太平洋炭鉱労組の書記になれ」と言われました。高野実さんを社会党幹部とばかり思っていた私は、「共産党員が、何故社会党のダラ幹の言う通りにしなければならないのか!？」と不満でしたが、とりあえず就職口が見つかったので、行くことにしました。

後になって、中国共産党指導部が、日本共産党幹部を説得して高野さんを入党させたことを聞いて、彼に対する中国共産党指導部の信頼の厚さには驚きましたが、当時の私には知る由もありませんでした。

他人は、私のことを『高野学校』生だったと言いますが、私にはそんな自覚はありません。元々、「高野学校」とは、左翼学生を労組書記局へ入れるために彼がしたことを指して、世間がそう呼んだに過ぎない、と私は見えています。

実際に「高野学校」を取り仕切っていたのは堀江さんでした。中ソ対立が激しくなるにつれ、高野さんは親中派に傾斜していくし、堀江さんは調停派になるし、二人の政治的関係は疎遠になっていきました。

その後、人民新聞に、長年高野さんの秘書をしていた高島さんが協力され、彼から労資協調へ傾いていった労働運動の実体について大変教えられました。

奔流する時代を見つめ続けて (11) 「人民新聞」第1176号 (4・25)

就職先は日本の賃金相場を決定していた 太平洋炭坑労組



釧路へ行ってすぐ、大変なところに放り込まれたことが分かりました。太平洋炭鉱労組は並みの労組ではありませんでした。日本の賃金相場を実質的に決めていたのです。私はここに来て、初めてそのことを知りました。

私を採用してくれた労組委員長は岡田利春さんで、後に土井さんと同期で国会議員となり、社会党副委員長まで務めています。当時の書記長は松橋茂

さんで、後に総評常任幹事になりました。太平洋炭鉱の石炭は、主に首都圏に電力を供給していた「東京芝浦火力発電所」に納入されていました。その理由は、その釜(ボイラー)に太平洋炭鉱の炭質が最も適していたからだ、と聞いています。

それで、太平洋炭鉱労組がストライキに入れば、国鉄への電力供給が止まり、山手線がストップすることになります。これが、「炭労・国労アベック春闘」の中身でした。

北海道の中央部に広がる炭層は、褶曲が酷く、機械化に不向きでした。これに反して、釧路の炭層は高さ1・8メートルと1メートルの炭層が重なり、海岸から4、5キロの地点に炭層が露出していて、そこから3～5度の傾斜で海底へ潜っており、機械化には絶好の自然条件を備えていました。

私は、坑内に初めて入った時、採炭・掘進現場の機械化に驚きました。米国製・ドイツ製の最新の掘削機械が入っており、狭い坑内を、大きな電動運搬車が太いコードを引きずりながら、猛スピードで走っていました。

当時は外貨が逼迫していたので、こんな高価な機械を良く輸入できたものだ、と聞いて見たら、「MSA資金で買った」、との答えが返ってきました。

「MSA資金」とは、朝鮮戦争で米軍が日本で軍需物資を調達した際、日本に支払われる外貨を政府が積み立て、国策遂行のために使われていたものです。太平洋炭鉱は民間企業ではありませんでしたが、政府資金が入った国策企業でした。

それで、当時の太平洋の鉱員一人当り出炭量は、三池の三倍はあった、と記憶しています。当然、坑内労働者の年齢は若く、若い労働者は殆ど高卒でした。当時、「請負給」が一般的でしたが、既に太平洋炭鉱では「時間給」に移行していました。

採炭能率が上がれば、請負給では支払賃金総額が急速に増えていくので、会社にとっても時間給の方が得だったからでした。請負給だと年配者の意見が重視されますが、ここでは職場で若い者の意見が良く通るようになっていました。

それゆえ、労働者の考え方も、古い因習に囚われず合理的で、私と彼らとの間で議論しても、違和感はありませんでした。

春闘の季節になると、労組事務所内は、独特の雰囲気になりました。太平洋炭鉱が「重点スト」

に指名されると、東京芝浦発電所の貯炭量が見る見る減っていきます。

その数字が労組事務所に表示され、執行委員の間では「いつ国労がストに入るのか」「政府の中労委への調停申請は何時になるのか」「調停は何時出るのか」、そんな話題で持ちきりでした。

そこには、「日本の賃金相場を決定しているのは俺達だ」、との自負に溢れていました。

奔流する時代を見つめ続けて (12) 「人民新聞」第1177号 (5・5)

炭鉱ゆえの条件下で盛んだった 職場闘争



6月の定期大会を前にして、松橋書記長から大会報告書に炭鉱合理化批判の草稿を書いてくれと頼まれました。文章を提出したところ、報告書に殆ど無修正のまま掲載されて、驚きました。釧路の市街地から離れた炭鉱には、社宅が広がっており、労組の組織も職場だけでなく、社宅にも町内会として存在していました。ストに入ると町内会毎の集会や、隣組単位の小集会が開かれ、執行委員が手分けして参加していましたが、私もそこへよく連れて

いかれました。

即席で何を聞かれるか分からないので心配でしたが、出て見るとザックバランで、彼らと気軽に議論でき、私には大変勉強になりました。

当時、炭鉱労働運動というと、職場闘争で有名でしたが、これは炭鉱特有の労働条件によるもので、他の産業への波及には壁がありました。

一例を挙げると、下深く存在する空洞の坑内は周辺から大変な地圧を受けており、この地圧を受けて、自然条件が時と共に千変万化します。

例えば、太平洋炭鉱では炭層と岩盤との間に、20～30センチの粘土層がありました。粘土は、周辺の水を吸収すると、見る見るうちに膨張し、坑道を塞いでしまいます。坑道が塞がれば、人は逃げ出せなくなるし、空気も入らなくなります。大急ぎで膨れ上がる粘土層を取り除かなければなりません。

この緊急作業に対して、労働者側は職制に対して、特別な報酬を要求します。これが職場闘争の一例です。それゆえ、職場闘争は頻発し、労組事務所内は「一番方」の鉱員が上がってくると、彼らの執行委員とのやり取りで、いつも騒然としていました。

六二春闘で 劣悪な労働条件の組夫現場を調査

私は「調査部」へ配属になりました。調査部長はTという、私よりも若い採炭夫でした。当時、彼が取り組んでいたのは、職種給の是正でした。

請負給から時間給へ移行したものの、急速な機械化・合理化で、採炭の直接部門と機械を扱う間接部門との境界が曖昧になり、間接部門の直接部門化が進んでいました。

それで、各職種の熟練度・危険度・難易度などを数値で評価し、それに基づいて既存の職種間格差を是正しよう、というものでした。

太平洋炭鉱の賃金形態は、全国に先駆けて請負給から時間給へ移行しましたが、請負給者の直接夫(採炭・掘進・仕繰という直接採炭作業に従事する職種)は、時間給に変わったとはいうものの、依然として直接夫優位の状況が残り、間接夫への不満がありました。

実現には、さまざまな紆余曲折がありましたが、組合側の主張には、会社側も一概に否定できない正当性があり、翌六一年の春闘で、ある程度要求が通りました。

彼が六二年春闘で取り上げた課題は「組夫制度」でした。太平洋炭鉱で組夫を常時使っていたのは、最も危険が伴う、新規の採掘現場を作る仕事でした。

これは地層など自然条件が未知な領域なので、危険が多く、事故の発生率も高かったし、常時その仕事があるわけではないので、会社は本工を避け、組夫を使っていました。しかし、これを放置しておく、本工の職場が低賃金・劣悪な労働条件下にある組夫に侵食される恐れがあり、会社との間で一線を引いておく必要がありました。

それで、調査部長と組夫現場の調査に入りました。本工と比べて、彼らの労働条件の劣悪さには驚きました。

休憩一時間の八時間労働とは、坑口から坑口までのことで、坑口から人車に乗って、下まで降り、そこからそれぞれの現場まで歩く時間は拘束時間の内でした。それで、本工の場合、一斉休憩が一時間あるので、実労働時間は5～6時間でした。本工の休憩所はビニールで密閉され、炭塵などが埃が入らないようにしてあり、そこで食事を取り、一時間休憩していました。また、この時間は組合活動の時間でもあり、幹事会報告や職場の様々な問題が話し合われる場でもありました。ところが、組夫現場に行ってみると、余りの違いに驚きました。昼飯の時間だというので、何処かで飯を食うのかと思っていたら、発破を掛けた坑道にある炭車の横でした。粉塵が舞い上がる所なので、口の中がジャリジャリする中で食事をしていました。

また、特定の便所がないので、彼らは坑道の中で用を足しており、その横で食事を取っていたのです。

奔流する時代を見つめ続けて (13) 「人民新聞」第1178号 (5・15)

「職務給」受け入れた労組執行部 風当たりも強まり退職を決意

組夫の労働現場の状態を組合の報告書にありのまま書いたところ、大きな反響がありました。これは労働関係の全国誌『調査と資料』にも転載されました。

組合員の中にも、劣悪な組夫の労働条件を放置しておく、自分達の領域が侵食されるのではないかと、との恐れがあり、六二年春闘で前進させることができました。

六三年春闘で調査部長Tが取り上げた課題は、「監視断続業務の規制」でした。監視断続業務とは、八時間労働制を定めた労働基準法の中で、その例外措置として八時間を越える労働を許された業務でした。

例えば、安全灯の管理・受け渡し業務がそうでした。坑内にもこれに類する業務に対し場に対して、監視断続業務が許されていました。

労働現場の聞き取り調査をしてデータを集め、資料で裏付けし、労働時間の短縮を求めたので、監視断続業務の範囲は縮小されました。

この間、Tが取り組んだ課題に、職場闘争の成果を正式に労資協定の形で確定させることができました。職場闘争で勝ち取った成果は、その時々が起こった特殊な条件の下で発生したものであり、既成事実ではありましたが、他の職場に対して無条件の適用とはなりませんでした。

それを、春闘の賃金交渉の場で、協定書に書き込ませることによって、彼は労資協定化しようとしてきました。これは全ての職場闘争の成果に適用されたわけではありませんが、職場闘争の成果を確定させ、それを一般化する上で、一定の前進がありました。

六四年、Tは書記長となり、Hが新任の調査部長となりました。この春闘で、会社は「職務給制度」を提案してきました。

「職務給制度」とは、この当時、電機・鉄鉱など主要産業で導入されていた制度です。「同一労働同一賃金」の原則を廃止し、賃金査定の権利を労働者から奪い、資本家の基準で思想差別する、労働者の奴隷化を目指した賃金制度でした。

既に労組執行部は、この会社案受け入れで固まっており、Hの力だけではいかんともしい難い情勢を私は感じ取っていました。また、私に対する風当たりが陰に陽に強くなっていくのを感じていました。

それで、私は組合の教宣資料に、職務給反対の解説を一問一答の形で書き上げ、退職する決意を固めました。この解説は、全国誌の『労働旬報』に転載されました。

私の運命を変えた「中ソ対立」の公然化



この当時、私に無関係のところでは私の運命を変える、とんでもない事件が進行していました。それは「中ソ分裂」の公然化でした。

63年11月、堀江さんから突然電話が掛かってきました。「札幌で会いたい」と言われたので、指定された場所に行ったところ、堀江さんのほか、道炭労講師団の人たちが来ていました。

道炭労講師団とは、道炭労が編成していた学習会講師団で、道炭労は各支部へ定期的に彼らを派遣し、学習会を開いていました。それで、彼らと私

とは既知の間柄でした。

そこで堀江さんが話したことは、58年と60年に二回開かれた国際共産党会議の詳しい報告でした。私もマスコミ報道で漠然とは知っていましたが、詳しい中身を聞いたのは初めてでした。会議後に、簡単なコミュニケが発表されたに過ぎず、詳細は分からなかったのです。60年の会議では、中ソ両党間で原則的な問題を巡って、激しい論争が行われ、第三者の仲介などでは解決できないほどの深刻な事態に陥っていることを、私は初めて知りました。

堀江さんが、日本共産党中央政治局の中ソ対立に関する立場、として私達に話した内容は、「ヴェトナム抗米戦争勝利のため、中ソ両党に和解を求める」、という「調停派」としての立場でした。

私は、「中ソ両党間の関係がそんな曖昧なことで対応できるものでなく、国際共産主義運動上の原則的な対立だから、各国で起こっている状況を見て、中ソ両党の対立が日本共産党の分裂を招くだろう。その結果、個々の党員にいずれを取るのか、党は選択を迫ってくるはずだ」と考えました。

奔流する時代を見つめ続けて (14) 「人民新聞」第1179号(5・25)

中ソ対立が党内に波及 「志田派の残党」として除名される



釧路市の若い職員Yは党員で、私と友達でした。彼はもともと、中国共産党の熱烈な支持者で、彼にこの事を話したところ、北京放送局に中国共産党支持の手紙を出し始めました。すると、北京放送局は早速日本からの手紙として、彼の手紙を紹介します。すると、彼はまた手紙を出し、また放送で紹介されます。これに驚いたのは、日本共産党内の「中国派」でした。早速、政局員の岡田文吉が釧路に飛んできましたが、どうせ彼の言うことは分かっていたので、私は会いませんでした。もともと道内には「志田派の残党」がいました。この「志田派の

残党」とは、共産党が私達のことを指して使っていた言葉でした。

彼らの中の一人が、道炭労講師団のメンバーだったので、私も彼らの存在を知っていました。私は六四年春、「志田派の残党」として、党を除名されました。これは私の望むところで、今更何の未練もありませんでした。彼らから「関西に来ないか」との誘いがあり、65年春、私は釧路を離れ、大阪へ行くことにしました。

住友銀行本店占拠事件 そして佐藤訪米阻止闘争



大阪に出てきて三カ月ぐらいたった頃だったと思いますが、華僑が新聞を出すので来て欲しい、との声が掛かりました。

それまで日本国内では、日本共産党機関紙「赤旗」が中国側の意見を伝えてきたのですが、中ソ対立が深刻化するや、「赤旗」はその役目を放棄します。そこで、中国共産党は日本で独自の新聞、「中国新報」(ママ)を発行することになります。資金の直接の提供者は、主に関西の日中友好商社でした。

中ソ論争が中国国内に飛び火し、国内に存在するソ連との調停派、いわゆる「実権派」と「毛派」との対立が深刻化しました。毛派はこれを党内対立を超え、大衆動員で乗り切ろうとします。いわゆる、「文化大革命」の始まりでした。

日本国内では、大学生を中心に「ヴェトナム反戦運動」が高揚しますが、それと共に、この運動の矛先が、大学内の改革に向かうのは自然の勢いでした。

もともと、大阪は社会党内の親中国派(佐々木派)の強い土地でした。佐々木派は、この新聞を、自派の政治新聞として有効に使おうとします。

大阪の社会党親中国派の元締めは、当時全港湾関西地方本部委員長の山本敬一さんでした。当時、彼は大阪府議会議長を兼ねていて、私は彼の自宅や府議会議長室に出入りして取材していましたが、そこで「住友本店占拠計画」を聞きました。

全港湾は当時、住友電工の下請会社に労働組合を組織しましたが、親会社が中々それを認めようとしません。それで彼の案じた計画が、住友財閥の総本山である住友銀行本店の占拠でした。当日、大阪中ノ島にある住友銀行本店に行くと、既に赤鉢巻にヘルメット姿・革靴の労働者が多数詰め掛けていました。しかし、機動隊はおろか、私服もガードマンもいませんでした。

それで、労働者部隊は、何の妨害もなく本店内にドカドカと入り、本店の広間全体が赤鉢巻・ヘルメット姿の労働者に占拠され、シュプレヒコールが響き渡りました。そして、何のトラブルもなく、全港湾のデモ隊は整然と住友本店から引き揚げていきました。

「さすがは大阪府議会議長の政治力だ」と感心しましたが、住友側と事前の綿密な打合せがあったことを伺わせました。他方で、「下請労働者の労働基本権の侵害は許さない」との全港湾の基本姿勢を、住友側も認めざるを得ませんでした。

こんなことで、佐々木派は自派の政治新聞として「中国新報」を有効に利用し、私は彼らが関係する労働争議への取材依頼で、追いまわされる毎日でした。



67年10月8日、羽田の佐藤訪米阻止闘争は、大学生による実力闘争の幕開けとして、世間に大きな衝撃を与えました。私も現場にカメラを携えていきましたが、写真撮影も命がけでした。警官隊に突入する学生を後ろから撮っているのは、迫力のある写真は撮れません。

だが、彼らの姿を前から撮ろうとすると、私が警官隊の側にいて、彼らに向かってカメラを向けてシャッターを押さなければなりません。学生も命がけなら、写真を撮る方も命がけでした。

(注) 「中国新報」は、「国際新報」の間違いと思われる

四分五裂の新左翼諸党派 現状打開願い「新左翼」を発刊

学生運動の取材にこちらが手を取られていると、中国の通信社・新華社東京支局から電話がかかってきました。私達「中国新報」編集部宛てでなく、経営者の華僑宛てでした。「最近、毛沢東思想の宣伝が疎かになっている」等々文句を言われ、仕方がないから『毛沢東語録』の勉強会もしました。日本国内における学生運動の高揚と、中国文化革命の宣伝紙との間に、ズレが生じ始めたことは否めませんでした。私が関西で所属していた政治グループは、「日本共産党解放戦線」を結成し、機関誌を出していましたが、この学生運動の高揚と「中国新報」の限界を前にして、大衆政治新聞を出すことを決断しました。それが「新左翼」でした。



日本共産党は、いわば老舗の左翼でしたが、新たに政治の舞台に登場した彼らに対して、この党は罵詈雑言を浴びせ、運動の足引っ張りをするだけでした。学生運動を牽引していた新左翼諸党派は、内部の党派闘争に持てるエネルギーを使い果たしてしまい、四分五裂の現状に甘んじていました。

1968年、「新左翼」を出したのは、こんな惨めな現状を打開しようとの願いからでした。

国際主義の内実を問われた「リッダ闘争」



大阪・天六(天神橋筋六丁目)に構えた「新左翼」事務所は、三人が入ればやっとの狭い場所でした。その事務所へ、吉田金太郎(よど号赤軍の一員として北朝鮮へ渡る。ピョンヤンで死亡したと伝えられる)が、当時としては珍しい折り目正しい制服・制帽姿で手伝いに来ていました。

学生運動は「ヴェトナム反戦闘争」から出発したとはいえ、闘いの矛先が大学改革に向かうのは避けられないと思われましたが、結局、東大安田講堂や京大時計台の占拠闘争という「政治ショー」に、集約されてしまいました。

闘争の成果をもぎ取るよりも、「闘争の美学に浸る」という学生

運動の限界が見え、大衆の関心は彼らから離れていきます。

国内の新左翼運動の閉塞状態——そんな重苦しい雰囲気の中で起きたのが「リッダ(テルアビブ)闘争」でした。奥平・安田・岡本の三人が、イスラエル・テルアビブ空港でマシンガンを連射し、多数の人々を死傷させた事件でした。

この闘争で、奥平ら二人は射殺され、岡本が逮捕されました。これに対する日本国内の新左翼党派の反応は、いずれも冷笑、あるいは冷淡なものでした。

このような彼らの狭いセクティックな態度に反発して私が書いたのが、彼らに連帯の意思を表明した「新左翼」の社説でした。「口先では『国際主義』を唱えながら、厳しい現実には直面するや、身を引いてしまう態度は、左翼として許せない」と思ったからです。

この社説を書いたからでしょうか、その後彼らが闘争を起こす度に、新聞社に声明などが送られてきて、結果として私は、日本赤軍の日本における「スポークスマン」の役目を担わされることになりました。けれども、私は国内で重信房子さんや日本赤軍のメンバーと何の面識もありませんでした。

私はもともと、日本から遠く離れているとはいえ、パレスチナの闘いに関心を持っていました。世界の矛盾の焦点でありながら、ソ連はイスラエルの国連加盟に拒否権を行使せず、パレスチナは地球の誰からも忘れられた「孤立無援」の状態でした。

それまでも、「新左翼」は出来るだけ現地取材もし、彼らの抵抗の姿を伝えつづけてきました。その努力に応えてくれた人たちが日本の中にいたことに、今なお私は誇りを感じています。

「カンバン方式」から見えた国による資本主義の違い



しかし、浅間山荘事件・連合赤軍事件等が連続し、新左翼諸党派は自滅していきます。それを契機に、新聞の名称を「新左翼」から「人民新聞」に変更しました。

その頃、新左翼勢力の一部が『労働情報』を出しました。彼らとは付き合いましたが、彼らは労働運動と政治運動との混同から抜け出すことが出来ませんでした。

80年代に入るや、高品質・低価格の日本製品が世界市場を席捲します。それで、トヨタの「カンバン(看板)方式」が世界の注目を浴び始め、「日本的生産方式」としてもはやされるようになります。私は炭鉱での労働運動の経験から、その意味が直ぐ分かりました。

長い製造ラインの労働者を小集団に分割し、各グループ間で「欠品ゼロ」を競わせるというやり方は、またたく間に日本中に広がりました。新左翼も含めた日本の左翼は、コスウェットシステムを「苦汗制度の再現だ」として批判しましたが、私はこの批判には組みませんでした。

これは欧米でも導入が試みられましたが、いずれも失敗に終わっています。その理由は、「階級社会」の欧米に対し、日本は貧富の差こそあれ、段差・切れ目がなく繋がった、独特の社会だからです。

そのため、日本では職制の権限を分割された小集団へ委譲することに抵抗がありませんが、欧米の場合はここでつまずいてしまい、前に進むことが出来ませんでした。同じ資本主義とはいえ、国境・地域が変われば、こうも社会の仕組みが違うことに気付いたことは、私にとって大変勉強になりました。

奔流する時代を見つめ続けて (16) 「人民新聞」第1183号 (7・5)

「東欧社会主義体制の崩壊」で喪失した正当性



90年代に入って、大変衝撃的な事件が起こりました。ヨーロッパにおける「社会主義体制の崩壊」です。東ベルリンの壁の崩壊、難民の西ヨーロッパへの大量流出、東西ドイツの統一等々。だが、東アジアでは未だに「冷戦体制」が存続しており、これに寄生して醜悪極まるキム・ジョンイル独裁体制が残存しています。私にとって最も深刻だったのは、冷戦体制の崩壊によって、これまでの私の理論的正当性が喪失したことで

した。それで、さまざまな出版物を捜し求めましたが、最も頼りになったのは、平田清明著『経済学と歴史認識』(岩波書店)でした。

マルクス『資本論 三』(岩波文庫版)455ページには、第一巻の結語として、次のように書かれています。

「資本主義的生産様式から生ずる資本主義的領有方式は、したがって資本主義的私有は、自己の労働に基づく個別的な私有の第一の否定である。しかし、資本主義的生産は、一種の自然過程の必然性をもって、それ自身の否定をもたらす。それは否定の否定である。この否定は私有を再興するものではないが、しかしたしかに、資本主義時代の成果を基礎とする、すなわち、協同と土地及び労働そのものによって生産された生産手段の共有とを基礎とする、個別的所有を作り出す。

いうまでもなく、個人の自己労働に基づく分散的私有の資本主義的私有への転化は、事実上既に社会的生産経営に立脚する資本主義的私有への転化に比すれば、比較にならないほど長く、過酷で、困難な過程である。前のばあいには、少数の篡奪者による民衆の収奪が行われたのであるが、後のばあいには、民衆による少数の篡奪者の収奪が行われるのである」

これを解説していたらきりがないので止めますが、「個別的」とは、原文でindividualであり、フランス革命によって生まれた「分割地所有」を指すと見なされていました。しかし、この言葉は平田さんの指摘の通り、「全体的(total)」に対立する言葉である「個体的」と訳すべきです。マルクスは人類の歴史を貫く基本的矛盾を、「個性」と「全体性」との矛盾と捉えているからです。

「個人的」と「個体的」、一字の違いですが、読み手にとっては大きな違いです。「個人的所有」といえば、フランス革命によって生まれた「分割地所有」を連想するのが当然の流れですが、「個体的所有」と言われれば、その対立概念である「全体的所有」を想起し、人類史全体を貫く「個性」と「全体性」との対立と捉えることになります。

一字の翻訳の違いが、とんでもない誤解を生み出すこととなります。そこには翻訳者のマルクス主義の理解の程度が試されています。資本論第一巻結語の部分の正な意味が、この本を読んで初めて判りました。この中に出てくる「個体的所有」とは、人類史を貫く全体と個体との矛盾の展開、この矛盾を非和解放的な段階にまで高めてしまった資本主義、この歴史的な壁を突破するための闘いが持っている歴史的任務とは何か、その回答がここに書かれていました。

今まで何べんもこのくだりを読みながら、漫然と読んでいた自分に気付き、新たな勇気が湧いてきました。その後、田畑稔さんが『マルクスとアソシエーション』(新泉社)を出し、運動と理論との間に掛け橋を作られ、ここにきて、私も未来に自信を取り戻すことができました。

グローバリズムへの対抗軸としての「マオイズム」(毛沢東思想)

私は、「もしマオイズム(毛沢東思想)が無かったら、今日の日本は無かった、と考えています。そしてまた、この現代でも「マオイズムはグローバリズムに対する有効な対抗軸だ」と考えています。一二年前、私は、サミール・アミンをパリの自宅に訪ねました。仕事を終え、お茶を飲んでいました。国民経済建設に話が及んだ時、彼はこう言いました。

「国民経済建設とは、それぞれの国で、農業と工業との循環を作り出すことです」。これがマオイズムの核心です。



80年代初め、彼は『マオイズムの未来』(第三書館)を出していますが、彼はこの本を書くにあたって北京を訪問し、関係者に直接取材しています。彼はこの訪問で、五カ年計画作成にあたって中国共産党内で対立があったこと、何を巡っての対立であったのか、彼らから直接取材し、確認していました。

対立軸は「五カ年計画策定に当って、労働者階級と農民階級との間に所得格差をつけるのかどうか」、を巡ってでした。社会主義経済建設を巡ってソ連で行われたこの論争は「原始的蓄積論争」と呼ばれ、世界的に注目を浴びました。それゆえ、この論争は既にソ連で行われており、中国の論争はその二番煎じにすぎません。

奔流する時代を見つめ続けて (17) 「人民新聞」第1185号 (7・25)

マオイズムでよみがえった敗戦後の日本経済



1929年に世界大恐慌が発生しますが、スターリンは「これで世界戦争が避けられない」と判断し、重工業建設を決断します。だが、重工業建設には莫大な資金を必要としますが、この資金をどのようにして捻出するかを巡って、国内で論争が起きました。

彼が下した結論は「農民に農業機械を製造原価よりも高く売って調達する」でした。言い換えると、ソ連の「五カ年計画」は、農民階級への過剰な収奪を前提に作成されました。

だが、もし中国で同じ事をしたら、社会主義体制の基礎をなす労働者階級と農民階級との政治的同盟(労農同盟)にひびが入り、社会主義政権に対する農民の信頼が失われてしまいます。そこで、中国共産党指導部が出した結論は、「五カ年計画策定に当って、労働者階級の平均所得と農民階級の

それとを同額にする」でした。

これは経済的にいうと、工業よりも農業の方が生産性が低いので、市場の自然発生的な調整に委ねるなら、自ずから労働者の賃金の方が農民の所得よりも高くなります。そうなれば、農民は農機具・農業資材・農薬などの工業製品を購入できなくなり、工業の発展にも支障を来します。そこで農民の所得を、工業製品を買える水準にまで人為的に引き上げることで、農業と工業の均衡が取れた経済発展が可能となります。

従って、工業部門と農業部門とが均衡した「国民経済建設」の立場からいうと、市場による調整(経済的合理性)よりも、政治的な選択の方が優先されなければなりません。

これと同一の文言が、日本の「食糧基本法」に書かれていたのをご存知でしょうか？この法律は、10年前の「米の輸入自由化」と共に廃止されましたが、この第二条には「農民の年間平均収入が都市労働者の年間平均賃金と同額になるよう、米価を定めなければならない」と書かれてありました。

こうして、日本の戦後経済はマオイズムによってよみがえったのです。ソ連における「社会主義的原始蓄積論争」、そして中国で生まれた「マオイズム」がなければ、今日の日本はありませんでした。

「高い米価」が工業—農業にベルトを掛け国民経済の循環を生んだ

戦後日本の経済復興計画に、誰がこれを書き込んだのでしょうか？私の推測ですが、戦後の日本経済復興計画を作るために復興院(戦中の企画院)に集められたのは、当時東大経済学部にいた労農派系の学者でした。

マルクス経済学者は戦前、共産党系の「講座派」と、社会党系の「労農派」に分かれていましたが、

講座派の学者が政治的に解放されたのは45年10月10日。それまで監獄に拘束されていた共産党幹部が解放されてからでした。

労農派も講座派も含めて、マルクス経済学者は戦前、ソ連の中で巻き起こっていた「原始的蓄積論争」の行方、それに対する中国共産党の反応を注視していたはずで、それで日本の食糧基本法にも同じ文言が書き込まれることになった、と私は推測しています。

私も共産党のピラを撒いていると、労働者から「米価が高いから生活が苦しい」と、よく文句を言われました。しかし、高い米価のおかげで、農民は農薬・農業用資材・農機具など工業製品を購入することができ、こうして工業と農業との間にベルトが掛けられ、国民経済の循環が生まれたのです。

奔流する時代を見つめ続けて (18) 「人民新聞」第1187号 (8・25)

マオイズムは途上国の「守り神」そして反グローバリズムの柱

現在は「グローバリズムの時代」といわれ、価格万能、「何でも安けりゃ結構」との言説が世界中で大手を振って闊歩しています。

しかし、これで困っているのが途上国です。自国で生産している農産品に比べて、外国から輸入する肥料・農薬・農機具などの価格が、彼らの所得と比べて余りにも高いので、買うことができないからです。

したがって、反グローバリズムの柱の一つがマオイズム、すなわち「それぞれの国で農業と工業との間で経済的循環を作り出すために、農民の平均収入を都市労働者の平均収入と同額にするよう主要農産物価格を設定する」という原則です。

こうして、戦後日本経済復興の青写真となったのはマオイズムでした。しかし、この成功に溺れた自民党は、農業に資金をつぎ込むこと自体が目的となり、日本の国家財政を破綻の淵にまで追い込んでしまいました。

何事も「過ぎたるは及ばざるが如し」です。日本では、「我が国の戦後復興は、もっぱら米国が提供してくれた資金のおかげだ」との言説が横行していますが、これは間違いです。国際共産主義運動の成果・マオイズムが無ければ、戦後の経済復興は有り得ませんでした。

現在、途上国が自国の資源を基礎に自前の工業を興そうとすると、多国籍企業が低価格商品を持ち込んで、それを潰してしまう、ということが横行しています。これを国際基準として公認させようとしたのが、「投資保護協定」でした。

昨年九月、メキシコのカンクンで開かれたWTO総会で、先進国は「投資保護協定」を国際基準として公認させようとしたましたが、途上国の反対で潰されました。マオイズムは途上国の守り神なのです。

朝鮮・インドからも渡来していた「シルクロード」東端＝古代の日本

「新左翼」、「人民新聞」を通じて私に大きな影響を与えた人々の一人として、私にとって忘れられない人がいます。I君という、韓国青年同盟大阪府連の幹部でした。

彼の一言が無ければ、私は日本の古代史に関心を示すことはなかったでしょう。当時、韓国内で

軍事独裁政権反対・民主化運動が高揚し、彼らと連帯して、国内でデモや集会などが頻繁に行われました。

それで、I君とは頻繁に連絡を取り合っていました。ある時、私は酒飲みに誘われ、飲んでいた時、彼は私にこう言いました。「日本の天皇は金官伽耶の王族の末裔だ、と韓国人は見ているんです」。

私は、天皇家の中だけで使われている言葉が朝鮮語に近いことを知っていたので、「やはりそうだったのか」と思いました。

朝鮮で日本の「古事記」「日本書紀」に当る「三国史記」「三国遺事」には、金官伽耶の王族について《インドから渡来した》との記述があります。古事記や日本書紀には、《船で海を渡ってきた渡来人の一団が京都の久美浜近くに上陸し、陸路で大和に入った》との記述があり、これが金官伽耶の王族亡命を指しているとされています。

彼らを通った道には、鉄器を作った集団の跡が点々と残されており、「鉄の道」とも言われています。今風に言えば、彼らはハイテク集団でした。彼らが大和で主導権を握ったであろうことは、容易に想像されます。

「古代、インドから日本に人が渡っていた」という話は、唐突ではありませんでした。戦後、大野晋学習院大教授が「日本語タミール起源説」を発表し、注目を浴びました。

タミール人はインドにおける先住民族です。中東でアリア人によって農耕文明が発展し、彼らはインド大陸に進出し、その結果、先住民であったタミール人はインドの東南部地域に押し込められます。NHKTVで見ましたが、タミール人は「魔除け」として狛犬の石像を使っており、日本の神社の入り口に置かれているものとそっくりです。確かに、日本語とタミール語の間には関連性が認められますが、文法が全く違うので、現在学会ではこの説は否定されています。

しかし、ヴェトナムでローマ帝国の金貨が見つかっており、古くから「絹の道」がヨーロッパとの間で通じていたことも判っており、古代からアジアとヨーロッパの間には、今考えられている以上に広い交易関係がありました。

奔流する時代を見つめ続けて (19) 「人民新聞」第1189号 (9・15)

「渡し」を生業にしていた渡邊氏は大阪が発祥の地

渡邊という私の姓も、金官伽耶王族タミール渡來說に関心を持ったきっかけとなりました。大阪に来て驚いたのは、目抜き通り御堂筋の出発点に掛かっている橋の名前が「渡邊橋」だったことでした。

渡邊氏の本貫地を示す渡邊神社が東成区にあり、ここが渡邊氏発祥の地であることを確認しました。人名辞典によると、「福島県中通りの渡邊氏は多田源氏、源頼光の家臣渡邊綱から発している」と書かれていました。

私は子供の頃、父に「うちの先祖は誰？」と聞いたところ、「大江山の鬼を退治した源頼光の家臣、渡邊綱だ」との答えを覚えていたので、父の話はまんざら嘘ではありませんでした。

関西に来て「東北と違う」と思うことは、関西の農民は、東北の農民と違って、自分の出生・出目について無関心だ、ということです。これは、関西の農民が戦国・徳川時代を通じて、天災や戦乱

などで移動が激しかったからでしょう。

日本は、名古屋と京都の間で文化的に二分されている、といわれています。酒の辛口と甘口、醤油の薄口と濃口、甘い味噌と辛い味噌等々。この違いは、氷河時代にシベリアから渡来した先住民が住む地域と、氷河時代が明けてから朝鮮半島や大陸から渡来した人たちが多く住む地域との違いに由来している、といわれています。

渡邊とは、もともと「渡し」を生業としている人たちを指した言葉です。当時大阪湾は高槻・枚方の辺りまで入り込んでいたはずで、そこには無数の島や浅瀬があり、そこで暮らしていた人達が私の祖先でした。

このような海を生活に基盤としていた私の祖先は、遠くインドから海を渡って、はるばるユーラシア大陸の東の果てにある日本に流れ着いたのではないかと私は推測しています。朝鮮半島に、インドからはるばる海を渡って流れ着いた人たちがいたとしても、不思議ではありません

「君が代」は北九州王朝の春の祭礼の歌だった

この趣味が嵩じて、史跡を訪ねて旅もしました。これで、様々な発見がありました。

福岡の志賀島は中国・後漢の王から送られた金印が出たことで有名ですが、その近くしかかいにある志賀海神社を訪ねました。ここには数え切れない鹿の首が奉納されており、一見してここが鹿をトーテムとする氏族の氏神様であることが判りました。

鹿は志賀・滋賀と字や読み方を変え、地名や苗字として全国各地に残っています。熊野は熊をトーテムとする種族の証であり、加茂は鴨をトーテムとする種族であることを示しています。

ここの神主に「春の祭礼でどんな歌が詠われるのですか？」と尋ねると、「わが君は千代に八千代にさざれ石の、いわおとなりてこけのむすまで」と詠ってくれたのには驚きました。志賀海神社は北九州王朝の氏神様でした。

これは「君が代」の元歌で、「詠み人知らず」として古今和歌集に載っています。これは古田武彦さんが指摘していたことですが、現在の「君が代」は、北九州王朝の春の祭礼の歌だったのです。熊本・八女にある北九州王つくしいわい朝の王・筑紫磐井の墓も訪れましたが、大和政権の王墓との違いには驚きました。左右に四体ずつ、計八体の巨大な動物の石像が立っていました。それは阿蘇山の火成岩の彫刻で、象のような形をした巨大な石像でした。

しかも、既に剥げ落ちていましたが、朱の跡が残っていました。多分、全体が朱塗りであったに違いありません。大和政権の王墓との違いに驚きました。ここで王が主宰する儀式とはどんな雰囲気だったかを想像すると、その厳肅さに身震いする思いでした。

しかし、北九州王朝は唐が百済へ攻め込んだ時、救援のために軍隊を送りますが、百済が敗北するや、懲罰のため唐はこれを支援した北九州王朝の支配地域に軍隊を送り、占領しています。数の島や浅瀬があり、そこで暮らしていた人達が私の祖先でした。このような海を生活に基盤としていた私の祖先は、遠くインドから海を渡って、はるばるユーラシア大陸の東の果てにある日本に流れ着いたのではないかと私はいます。朝鮮半島に、インドからはるばる海を渡って流れ着いた人たちがいたとしても、不思議ではありません。

「唐」はなぜ日本を独立国として承認したのか

私はかねがね、日本の古代国家成立に関する学説に疑問を持っていました。それは、日本が大化改新によって成立した新政権の承認を求めて、遣唐使として小野妹子を派遣しましたが、唐は承認にあたって、従来のように冊封関係(封建的な主従関係)を求めず、独立国家として承認したことでした。

中国の歴代王朝は、周辺国が国交を求めると、冊封関係を条件にするのが常でした。日本の歴史学者は、唐が冊封関係を求めなかったことを、唐を取り巻いていた国際関係から説明していましたが、どうも靴底の裏から足の痒い所を搔いているようなもので、私は納得できませんでした。それは、大化改新後の新政権が仏教を国家の宗教としたことにあった、と私は推測しています。その中心人物こそ、天皇の面前で蘇我馬子を切り殺し、大化改新の幕を開けた藤原鎌足です。唐は朝鮮半島征服にあたって、新羅と組んで百済を滅ぼしています。新羅王朝は仏教を信仰していましたが、百済王朝が信仰していたのは道教でした。

道教は中国在来の宗教で、宗教というよりも、今風に言うと十干一二支説で将来を予測する占いの類でした。これに対して仏教は、唯一の絶対者である仏陀を信仰する一神教で、経典・仏像・伽藍を備えた総合的な宗教でした。

中国全土を征服した唐王朝が、一神教で壮大な伽藍建造物を備えた仏教を国家の宗教としたのは、当然でした。これを周辺国にまで広めようとして、朝鮮半島で唐は仏教を信仰していた新羅と組んで道教の百済を滅ぼします。

日本の大和でも、百済系渡来人と新羅渡来人との間の勢力争いが激しく、歴代天皇の代替わりはこの二つの勢力の交代でした。こんなことを続けていけば、日本も朝鮮諸国の二の舞になります。目先の対立にこだわらず、この状況を回避したいと考えていたのが、中臣(後に藤原)鎌足でした。

鎌足自身、新羅系の渡来人ですが、日本における渡来人同士の抗争を繰り返していれば唐に征服されることを恐れ、彼は「大化の改新」というクーデタに立ち上がります。その彼が何故大仏建立に最後までこだわったのか、判りませんでした。ここに来てその理由が見えてきました。

大仏建立は日本全土を疲弊のどん底に突き落としましたが、彼はこれを最後までやり遂げます。これによって、日本という国家が唐と対等に付き合うに足る国家であることを、彼は唐王朝に納得させようとした、と私は見えています。

大仏建立の記念行事は、正倉院御物から見て大変盛大な行事でしたが、招かれた人も朝鮮・唐からのみならず、ダットン人(中央アジアの遊牧民)やペルシャ人もいました。この痕跡は、東大寺二月堂の「お水取り」の行事に今なお残っています。

寺院は当時、単なる宗教施設ではありませんでした。法隆寺の遺物を拝観していた時、文書に「官寺」という判が押してありました。これは、法隆寺が今風の表現で言うと、官吏養成所、言い換えると東大法学部だったことを示しています。

仏教は日本古代において単なる一宗教でなく、国を治めるための学問でもありました。全国各地

の有力者は、こぞって頭のよい子弟を集め、東大寺の僧侶にしようと競っていたに違いありません。

亡命してきた百済王族を受け入れていた藤原鎌足

鎌足の墓が安威山の山頂で発見されましたが、その麓である茨木・高槻で彼に所縁のものが何一つ見つかっていないことを、私は不思議に思っていました。晴れた日を選んで山頂に登って大阪湾の方を見ると、黒いもやがかかった高層ビル群が見えますが、その後ろの上町台地が突き出た先に、かつては赤い四天王寺の伽藍が見えていたはずです。

四天王寺は、朝鮮半島との交易の玄関口だった難波津の港を守護するため、鎌足によって建立されました。子孫の繁栄を何時までも遠くから見守って欲しい、との願いを込めて安威山の頂に彼が葬られた、と私は思いました。

ところが、最近になってテレビで、「三島に鎌足の邸宅があった」と報じられました。三島といえば、今の高槻です。場所は鎌足一三代の子孫、石川利足の墓碑が出土した真岡だった、と私は推測しています。

この現地見学会に私も参加しましたが、墓碑が出土した場所には大きな平らな石が置かれており、そこで祭祀が行われていたことは明らかでした。周辺を掘れば、祭祀の遺物が見つかるはずです。晩年、彼がここに邸宅を構えたのには、理由がありました。彼は唐に滅ぼされた百済の王族の亡命を受け入れたので、彼らを監視する必要があったからだ、と私は推測しています。

高槻と淀川を挟んだ対岸の枚方が、百済王族の亡命地でした。この地は今でも「禁野」と呼ばれ、天皇直轄地でした。ここには百済王社があり、機織神社、天の川など、七夕に所縁の名が今なお残っています。七夕という行事は、道教の信仰の一つです。

ここを対岸から監視するため兵を置いたので、彼もそこに邸宅を建て、随時使っていたのではないのでしょうか。当時の海岸線は国道171号線の辺りで、邸宅の敷地はそこまで伸びていて、真岡まで柵を巡らしていたはずです。（終）